

趣味第一卷第七號目次

趣味

趣味の教育に關して……………一 上田萬年 南洋趣味……………三 副島八十八
 英吉利氣質と近代文學……………六 片上天弦 義太夫節表情派の凋落……………九 桃栗山人
 藝術趣味に對する社會の態度……………一六 鹽澤昌貞 印度の戯曲……………二四 姉崎正治

名家談

今後の劇……………三七 上田敏 文藝ヴェニスの評(獨文譯文)……………五七 アントン・フヘルベ
 俳優の修養……………四〇 箕山堂全 大會略評(佛文譯文)……………六一 ツエザレ
 將來の劇……………四三 望小山田薰 全ベニスの商人評(英文譯文)……………六三 メードレ
 新舊劇の前途……………四九 岡田正美

老手談叢

新粉細工……………五五 梶 鍛太郎 文字焼……………六一 前田 たか

脚本小説

敗亡……………一〇二
 西村 醉夢 春恨……………一〇六
 兒 玉 花 外
 毒杯……………一〇〇
 守 屋 王 臺 野いばら……………一〇九
 齋 藤 紫 軒

雜 錄

十年前の早稻田……………一〇九
 薄 田 斬 雲 「常闇」素人觀……………一一五
 黃 昏 生
 黒人の讀書趣味……………一〇九
 延 川 新 秋 流行の起因……………一一七
 H K 生

彙 報

文士劇○京都の洋畫家劇○大阪帝國座の新設 散す○大博覽會の場所○菊花品評會○美術界
 ○荒川重秀氏○女優學校試演○藤八拳の名弘 ○能樂界○落語界○諸演藝會○劇界○訃音○
 會○市立圖書館の兒童室○少年少女の會合○ 新刊紹介
 團子坂の人の出○東京市歌募集○名家の骨董四

繪 畫

風景畫……………小 林 鐘 吉 文藝協會演藝大會寫眞四葉(大會演藝部員一
 凄艶……………原 色 版 同長良堤エニス法庭の場常闇シャイロック)

新粉細工

梶 鋏太郎

新粉細工の道具……新粉……繪具……板片、籠……竹……
 すき油……取粉……木綿糸……生菜……けし……細工の準備
 ……簡単な細工……果物の細工……蟲……龜……鳥……猿……
 ……其他……保存法

牛込に死んで代りのない人が二人ある、一人は淺田の宗伯で、一人は寺町の新粉屋だと古くよりその名の高い新粉細工の名手は即ち梶鋏太郎氏其人である。氏は徳川將軍家の御三卿清水家の臣梶重之助景信の長子で、母の名はおすが、早く親孝行の譽高く、水野出羽守より賞状等を得、長州征伐の時將軍家茂に隨ふて大阪に赴き、慶喜公大政を奉還して大阪城を去るや、鋏太郎氏等亦相尋で江戸に歸る。彰義隊の成るや、氏實に其の一勇士として上野に奮闘し、戦敗れて脱走組に加はり、つぶさに辛酸を嘗め、明治五年より新粉細工を始め、一度警視廳に奉職して、十年鹿兒島の役には軍に従つて昔時の佛を忍ばしめたが、任を好まず、去つて再び新粉屋を以て今に至るまで凡そ四十年、遂に斯道に於て日本第一の評判を取り、曾て東宮殿下の御伽に召されてより、屢濱離宮に召されて、ある時は各國使臣の御慰みとして得意の妙技を現はして賞讃を博し、又大名華族御子様がた御不快の折伺候を命ぜられて御側に於て新粉細工に病床の鬱を慰め、その他園遊會等に

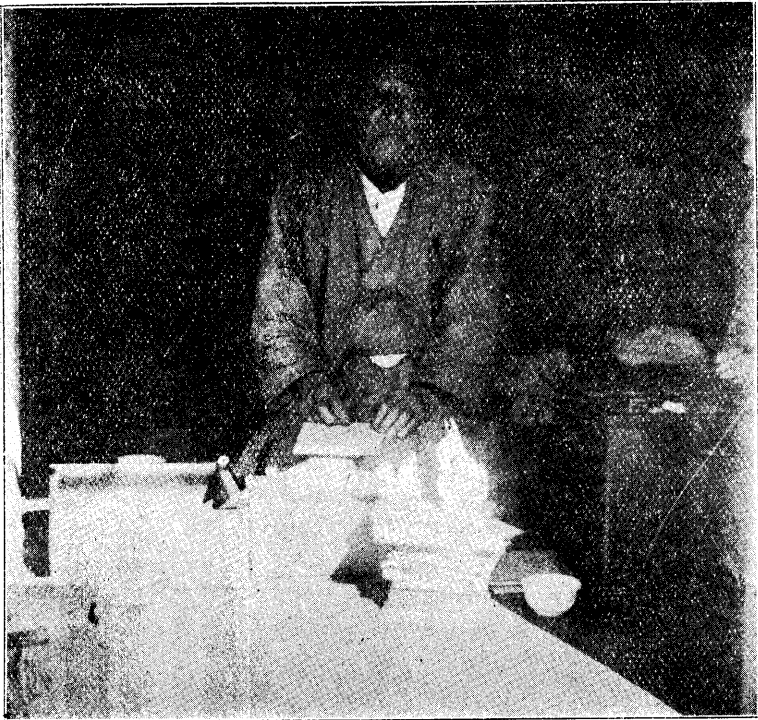
屢聘せられて、外人亦頗る氏の妙技に服して名聲都下に轟く。其の妙技は實に氏の天禀で、幼時よりお團子を貰つても食はずして種々の細工をして、出来よければ人にも與へて自からも樂しみ六十餘歳の今に及んで、耳遠く、右手ふるひて、よろづに不便なるに拘はらず、極めて緻密の細工を試み、雨降れば細工は休むも必ず一二度は外出散步せず氣が濟まず、終日徒手安座を嫌ひ、平日は朝三時頃より仕込みにかゝつて、牛込寺町邊の小供を喜ばせて餘生を樂しんで居られるのである。心ある人は訪ひ給へ、家は牛込原町二丁目八番地の浮世を餘所なる詫住居。

(一) 新粉細工の道具

新粉細工といへば、どうせ小供衆のお慰みですから、これに必要な道具と申しても、小刀、錐、鋏、火箸、松葉を束にしたものなど、すべてどこの家にもあるべき極く普通の品で新粉細工は出来るので、むつかしい所は色や手先の小細工などにあるのです。仕事臺は私は一尺四方位で二三寸の高さのものを御座敷では使つて居ますが、これは箱のかぶせ蓋様のものので澤山です。それから新粉を入れる箱、繪具や取粉を入れる器や箱などが揃へば宜しい。

小刀は私は二通り使つて居ります、一つは尖端がなくて、鑢の様な形で、これに柄がある形で、これに柄がなくて、これを巻いてあります、これで新粉細工を載せる板片を削つたり細工物を止める竹串を拵へたりする用に供します。今一つは鯉節小刀の様な、尖端の尖つた物で、細工物に細い筋を入れたり竹串を削つたり致します。

錐も二通りあつて、一本は普通の木の柄の全體で長さ五六寸程の



新粉細工人 梶 鉄 太郎

(一六六)

小さい物、これは唯穴をあけるだけに使ひますが、今一本は玉蜀黍殻を四寸程に切つて、これに蠶職の使ふ針程の先を附けたもので、先の長さが一二寸あります、この柄は果物に凹凸を拵へたり、動物や人物の體に凹凸を拵へたりするのに用ゐます。

火箸は尖端が丸く減つて居るとが必要で、果物の頭や蒂の所の引込、動物の眼を入れる穴など、すべて尖端の

尖らぬ穴をあけるに用ゐます、又寝せて使へば錐の柄で出来ない小さい凹凸も出来ます。

鋏は花鋏を用ゐて板片の切目の歪みなどを切り取り、又は竹串を切りなど致し、裁縫用の鋏で動物の頭や胴の兩脇を切つて耳や足を造り出したり、鳥の羽先尾先などを切るに使ひなど致します。

又青松葉を集めて徑五六分位の丸い束に拵へて中央を縛つて置いて、それで鶏の鶏冠の錐で突つ突いた様なものを拵へたり、蜜拵の皮にある同じ様なものを拵へたりするに用ゐます。

新粉を入れる箱は、可成縁の高い、厚い、めの細かな木で出来たものが宜いので、蓋が確乎出来れば更に宜しい。新粉は風に當つても日に當つても固まり、濕氣に逢へばゆるむものですから、その防禦の附く様にすれば宜しい。

取粉を入れるのは陶器の白粉溶器の様なもの、大きいのが宜い、徑三四寸あれば普通の場合の間には

合ひます、果物などの形が實物同様の大きさに出来揚つたのを、この粉の中に轉ばせる事があるから、小さいと不都合です。

繪具はブリキ製の、矢張白粉溶器の様な形のものへ溶かして、それに蓋が出来る様になつて居て、かういふのを色の數だけ備へて置きます。すき油も同じ容器へ入れます。

道具は先づ普通こんなものですが、この鋏なら鋏を、唯切るばかりに使はず、持つ所などをも時によつてはいろ／＼の用に使ひますから、道具の數は少く、特別の道具と云つてはなく、眞に道具らしい道具は使はないで、それで様々の形、小細工が出来るのですから、お小供衆のお慰みに宜いのみならず、器用なお方がなさいますと随分面白いものが出来ま

(二) 新粉細工の材料

材料は先づ新粉、次に繪具、板片又は籠、竹、すき油、取粉、木綿絲、生葉、けし等です。

●新粉

新粉は御承知の通り米の粉ですが、細工に使ふには、可成上等米を挽いて絹篩にあけたものが宜いので、それにも良否があつて、色の白いほど細工に宜しい。紙袋にはいつて五合入、目方二百匁あるのが平日は毎日四五本、園遊會などの時には七本も入ります。干物屋から上新粉と云つて買ひますので、それを團子をねる様に沸湯を少しづゝ入れてねるので、その時には手が離されません、手離すとねれ加減が狂つて了ひます。充分にねればねるほどよいので、それからふかすのですが、あまり充分にふかすと細工が仕にくいから生ぶかしにします。充分にふかせば、日が経つても割れが出ませぬが、細工に工合がわるいから生ぶかしに致します、どうせ一時のお慰みですから、何でも細工さへよく出来れば明

日になつて割れが出ても惜しくはありません、いかほど保存が出来、割れが出ても細工が拙ければ何にもなりません。粉が粗くても割れが早く出ます、きめの細かい程、即ち粉の挽きかた篩ひかたの丁寧なほど長く保ちます、きめの細かいのは細工にも工合が宜しいから、粉の挽きかた篩ひ方が非常に丁寧にさへあれば、細工もよく出来易く、長くも保存が出来るといふものです。又同じ新粉で同じふかし加減でも、季節によつて細工も仕易く保存も仕易い時節があります、春の櫻の咲く頃と八九月頃とが其の時節で、これが新粉細工に適當な時節です。この時節に丁寧に挽いて丁寧に篩ふた可成白い上新粉で拵へると、細工も仕易く、よく出来て、保存もよく出来るといふ譯なのです。

又洲濱細工と云つて新粉に砂糖を交ぜたので細工をすると、砂糖の爲めに、すき油を使はないでも艶がよく出まして、且つ長く保つて割れが出なくて宜

しいが、砂糖の爲めに繪具が散つて、どうも細かな細工は巧く出来兼ねますから、細工の方から云ふと今一息といふ處で、どうも保存も充分に出来細工もよく出来るといふ新粉細工の法はまだ見附かりませんやうです。

●繪具

繪具は、小供の弄ぶものであるからと云ふので警察の方でも中々細かく氣を附けられますから、一般に食用紅を使ひます、藥種屋から皆求めて來ますので、一通りの色は揃へて、その他は交ぜて色を出すのです。この中黒い色の新粉は、黄檗の木の黒焼を新粉に交ぜて拵へます、その黒焼も矢張藥種屋にあります。

●板片又は籠

これは共に細工した新粉を載せる臺として入用なので、板片に經木屋又は折商から分けて貰ふので、大抵普通四五寸幅、木地の可成白い美しいのが宜い、

椀の薄板で、折詰の折などにするのと同じ物ならば宜しい。長さは細工物に相當したのを選ぶか、相當の長さに切ります。籠は果物などを入れる其の籠がよいで、其れへ新粉で果物を拵へて盛る時などに用ゐます。

●竹

これは小刀でお團子の串程に割つて、右の板へ鈍揉みをして、その穴へ挿して短かく折つて、それへ細工物を挿して止めたり、又は細工物の足の心にしり、又は更に細く齒で糸の様に割いて、それを細工物の心にしたたり、竹の儘で細工に用ゐたり、竹はこの小細工に中々必要なものであります。

●すき油

これは細工の時に、これを掌や指に塗つて、それで新粉をいぢれば、新粉に艶が附いて、且つ新粉の保存がよいのみならず、細工が仕易くなるから、新

粉細工には皆これを用ゐるとになつて居ります。保ちにくい新粉細工ですが、すき油を水に溶かして、汚れない筆で細工物に塗るとを怠らなければ、細工物は随分保つて艶もよいもので、前に申した新粉細工の保たせにくい性を、いくらかこれに補つて少時でも長く保たせるとは出来るのであります。

●取粉

餅などに塗つて他の餅とくつつかぬ様にする粉のとて、やはり新粉と同じものですが、これは粉の儘で使ふので、吊し柿の粉を吹いた所とか、桃の上へ塗つて桃の皮らしく見せる時とか、蜜柑のむきかけの形を拵へる時などに使ひます。

●木綿糸

これは心にして細工をするともあり、又細工物を養甘を切る様にして木綿糸を以て切るともあり、いろ／＼の役に立てます、白糸で澤山です。

●生葉

これは果物などを拵へた時に、有り合はず木葉を取つて、その果物の葉らしく鉄で截つてその果物に出来た新粉を挿しなど致すのです。

●けし

これは梨を拵へる時などに、梨の皮の斑に用ゐるので、梨の皮の色を、いろ／＼の色を調合して出して、その色の新粉へけしを交ぜて指で伸ばして梨の皮の真に迫らしめる様にする場合などに用ゐます。材料は先づ普通こんなものです。

(三) 細工の仕方

いよく細工にかゝる時には、先づ湯を鉢に入れて、これに布巾を浸して、それへふかした新粉を押し附けたり、又は湯の中へ新粉を浸したりして水氣を含ませて兩手の四つの指と拇指とで段々新粉を押しては巻き込み、潰しては壘込み、折々筆で色を附けては又巻き込み、かくして入用だけの色の新粉

を用意して、色の着かぬ白い新粉をはじめ、色々の新粉を皆別々に離して新粉箱の中へ入れ、更に湯に布巾を浸したものに押し付け、又すき油を着けて段々新粉を巻き込み巻き込み、色々の色の新粉をいろいろの分量に取り合はせて細工をするので、一の色の新粉が不足すれば、白い新粉を、其の色の繪具を溶いた容器へ押し入れてその色を着けて巻き込みをすればその色の新粉が出来るのであります。しかし一度目に取り合はせたのと、二度目に調合したのとはいかに同じ色を、注意して同じ分量同じ割合に取つて調合しても同じ色は出にくいから、一つ物になる新粉は、可成それに要るだけの分量を一度に拵へて了ふとが肝腎であります。次に簡単な細工を始めとして、二三の細工物に就いてお話し致しませう。

● 簡単な細工

細工物の中、最も簡単なものは、繪具にある色の儘を便する細工物で、例へば染分手綱、染分の紐の類

がこれ、赤、青、白の三色の染分を拵へるとすれば、先づ赤の新粉を取つて夫れから小さい塊を取り分けて、両手の掌と掌との間で細長く丸めて押へて平たくし、次に青新粉を取つて同様にし、次に白新粉を取つて同様にし、赤白青といふ順序に重ねて人さし指と拇指とで振つて丸めてゆけば紐なり手綱なり染分の美しいのが出来ます。狎の涎掛などは、赤い紐の青い涎掛とすれば、先づ赤新粉を右同様細長く丸めて狎の首へ巻いて、結び目の所へは、別に造つた同様に細長く丸めたもの、中程だけをくつつけて兩端を離して、小刀で其のくつつけた中程の所へ堅に二つ切目を入ると丁度結目の様に見えます。次に青新粉を取つて稍太く、やはり細長く丸めて狎の胸の處の赤い新粉の紐へくつつけて、拇指と人差指とで、端から端へ段々に押し潰して薄くして、丁度涎掛の様に見せるのであります。長い紐とか果物に附く蔓とかは、新粉の塊を少許取つて、之を白

い木綿絲にくつつけて、絲の端を齒で啣へて、兩手の掌の間で絲を包む様に絲なりに新粉で包んで丸めて細長く伸ばせば、蔓や紐は出来ます。簡單ながらむ

氏の名を細工中、病後とて辭せらるゝを強いて乞ふて撮影したものである、場所は梶氏の自宅、南向きの暖かい室。

づかしいのは新粉で文字を現はすとて、盃の中へ金て壽の字などをよく現はします。茲に寫真で御覽に入れるは私の名前で、記者の御注文で始めて拵へたので極く拙うございですが、これは始め板片へ白新粉を伸ばして、それへ錐の先で文字を彫つて、黒新粉を掌で細長く丸めて、それを段々筆法通りに彫つた上へ置いて埋めてゆくだけのとてすが、随分手間はかゝります。(記者云初めに掲げた梶氏の細工中の寫真は、鶏の細工終つて今正にこの梶



自 作 姓 名

●果物の細工

細工物と申しても、何ても出来るといふ譯のものでありませぬ。先づ果物、蟲、龜、お猿さん、鶏、小鳥などが出来る易いものです。果物で、よく拵へますのは、林檎を左柿を右蜜柑のむきかけを前、即ち品字形に並べたもの、梨、柘榴、桃など、園遊會の時などやち

土産には、よく籠へこれらの果物を交せて盛ります、又果物へ蟲の附いた所なども拵へます。林檎は青新粉に白新粉を交せて充分巻き込んで林

楡の皮の青さに拵らへて、その塊の上面へ赤新粉を

風にすれば、この消えて行く所を上面から見ると、

延ばして、赤味の所は厚く、ぼかし即ち赤味と青い所との堺目に近づくに従つて段々薄くする様に、すき油を少許塗つた指先

丁度赤味と青い所との堺目のぼかしの所になるのです、すべてぼかしはかういふ風になります。

で延ばしてぼかししてゆくので、寫眞の向つて左は即ち出来揚りの林檎を割つて御覽に入れたの

寫眞の右側のは、細工の出来揚つた柿を豎に割た所で、

で、中央の下の方の山形に白い所は白新粉を心に入れたのが見えて居るので、それを包んで大部分を成して居るのは薄青い林

下の方の少し黒い所は帯に拵へた青新粉、その上の白い大部分は心にした白新粉、それを圓く包んで居るのは柿の皮

檎の皮の青さの新粉で、右側全體から上下へかけて弦月形に包んで居るのが赤新粉、これが上

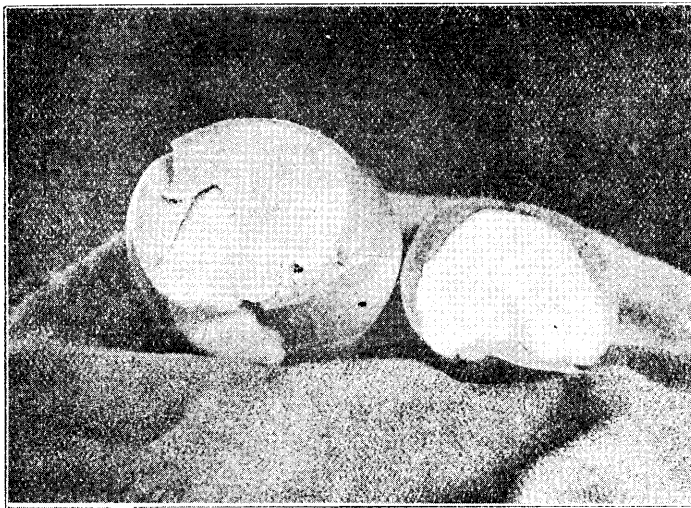
眞でははつきりしません、その上の方に弦月形に冠つて居るのが薄い樺色の新粉、頭の小さい黒い點は柿の頭の黒い

細くなつて遂には消えて居ります。細工をかういふ

新粉は赤黄白三色の新粉を交ぜ

細くなつて遂には消えて居ります。細工をかういふ

新粉は赤黄白三色の新粉を交ぜ



果物二つを割つた處

て巻き込んで平たくしたもので、それを黄色い新粉

粉に少許黄色い新粉を

交ぜて中實の色を拵らへて白

を延ばした下裏へくつつけて、

頭の方に近づくに随つて黄色い

新粉を心にして之を實の形に

新粉の冠りかたの段々薄くなる

様に樺新粉を押し上げ黄色い新

粉を薄くして、樺色が黄色い薄

皮を透かして見える様にする、

黄色の新粉の冠りかたが段々厚

くなるに随つて樺色の透いて見

えかたが段々少くなつて終に消

えるので、これは林檎のぼかし

とは違つて、色の堺目がぼんや

りして居るから、上から樺を冠

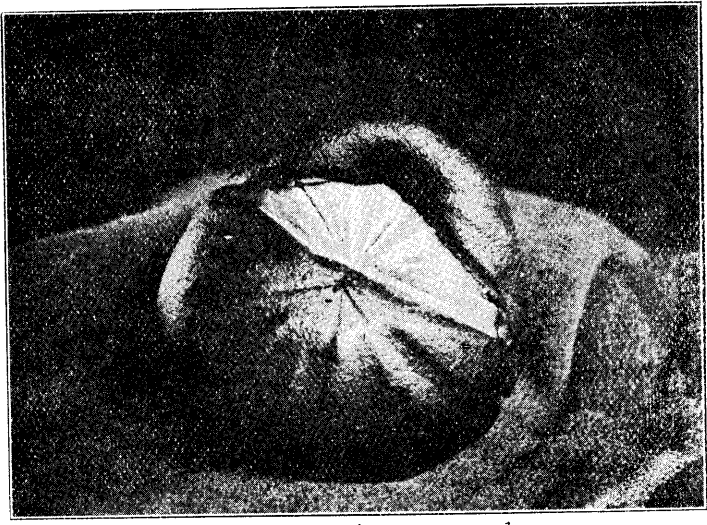
せて指で延ばしてはうまく出来

ません。

壹個の果物のある寫眞は、蜜

柑の皮のむさかけて、この蜜柑は、白を交ぜた赤新

を拇指の脇、爪のある所で軽く押へて、頭の中央を



鳥渡指で押し回めると蜜柑の形が出来る、次に小刀を取つて皮を一字に切り離して一方へ皮を寄せれば、取粉の爲めに新粉はくつついて居ませんから、樂に寄つて、中實が現はれて、且つ皮の下裏の白新粉が皮の裏の白い所になつて、丁度蜜柑のむさかけに見えます。尙紀州蜜柑などの様に皮にポツ／＼した小さい穴の澤山あるのは、松葉を束ねたので突けば本統の物の様に見えます。

柿や林檎の頭の所の引込などは、すべて火箸の先で穴をあけて、青新粉又は黒新粉を小さく丸めてその穴へ入れて、指先で其の穴の所を壓へ、そこを中心に八方へ例の玉蜀黍殻の錐の柄で細長い回を拵らへ、痕を拵指の爪と脇で壓へるのです。掌で始めに果物の形に丸めるのも熟練を要しますが、色が殊にむづかしいので、引込、凹などを拵らへるのも樂な様で随分むづかしいのです。林檎の葉、蜜柑の葉などは、有り合ふ生葉を林檎又は蜜柑の葉らしく截つ

て、その生葉の附いた小枝を其儘果物の蒂の所に差し込むともあります。

梨は皮に斑があります、あの斑の工合はけしを皮の色をした新粉へ交せて新粉を延ばすのが一番よく出来ます。梨の軸は竹串を梨の尻へ挿して、これに軸の色をした新粉を巻くのです。桃は毛が生えて居る爲めに皮の色が青い所も赤い所も共にぼかしがある様に見えます、あれは矢張出来揚つてから取粉の中に轉ばせると實物らしくなります。果物に蟲の附いてるのも面白い細工物で、これは果物よりも蟲に骨が折れるのです。

● 蟲

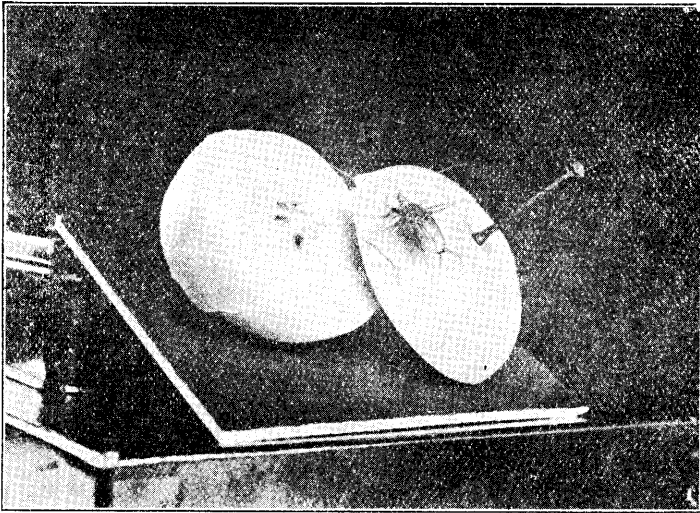
蟲は、きり／＼す、松蟲、其の他いろ／＼のを拵へますが、寫真にあるのは其の一つで、折れ曲つて居る大きい左右二本の足は、心に竹串を細く齒で副いたのがはいつて居るので、その竹の心へ新粉を足の様拵らへながら巻いて、折り曲げて、竹の先を

むいた梨の肉に拵らへた白い新粉へ挿いて、そこへ

附けます。この他の蟲もすべてかういふ風にして拵らへます。之を確乎果物の上へ止めるには目立たぬ位の、

(七六)

更さらに新粉しんこなを延のばして足あしの先さきを拵こらへたので、他ほかの足あしや鉄てつなどには竹たけの心しんは、いつて居ゐりません。口鬚くちひげは、竹串たけぐしを齒はんで絲いとよりも細よそく割きいて、適宜てきぎの長ながさに切きつて蟲むしの口くちの所ところに挿さし、蟲むしは先まづ胸どうや首くびを造つくつて、同時どうじに調合てうがした蟲むしの色いろの新粉しんこなの他ほかの一塊かたまりで羽はねを拵こらへて上うへへ着きせて、黒くろい新粉しんこな極ごくく少すこしを、すき油あぶらを充じゅう分ぶんにつけた指先ゆびさきで、よく艶つやの出でる様ように丸まるめて、眼めの所ところへ錐きりの先さきで穴あなをあけて、その丸まるめた小こさいい黒くろい玉たまを其その穴あなへ入いれて錐きりで又またよく壓おさへて置おくので、蟲むしの姿すがたは、手先てさきで拵こらへ、首くびの所ところや羽根はねの筋すぢは小刀こがたなの刃はで輕かるく



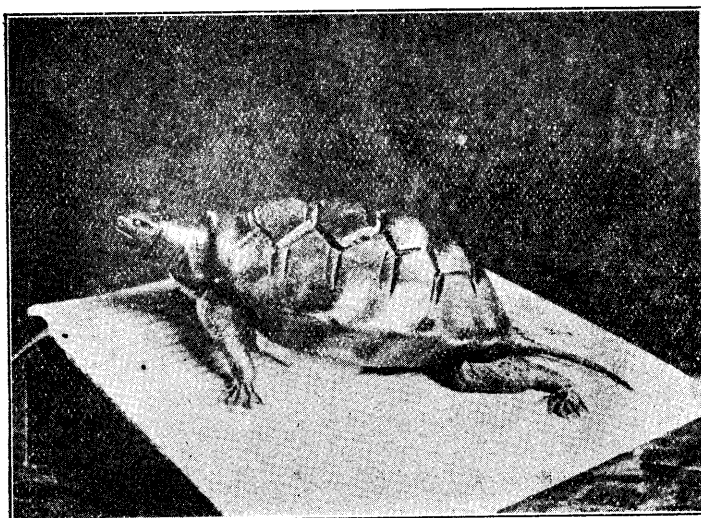
梨に蟲

てそれを縛しばつて絲いとの一方いっぽうの端はしを齒は、一方いっぽうを右手みぎてに持もつが、この蟲むしの居をる梨なしの細工さいくは、始め矢張やはり梨なし全體ぜんたいをむいた形かたちに白新粉しろしんこなで拵こらへて、小刀こがたな痕あとは左手ひだりてに梨なしをもち、右手みぎての拇指おゆびの腹はらを梨なしに當あて、梨なしを廻めぐはして拵こらへたので、木綿もめん絲いと

ち、梨を左手に持つて右手と齒に力を入れて、丁度
 養甘を糸で切る様にして二つに
 切つて並べたのです、切つた姿
 を別々に拵らへるのは面倒は兎
 も角實際と違ひまして、どうも
 巧く出来ません、全體を拵らへ
 て後で切つた方が實地にも適ひ
 巧くも出来ませす。蟲の胴と羽根
 でもさうで、一所に拵らへると
 は出来難いのみならず實地に違
 ひませす、どうもすべて細工物は、
 これらに限らず、一般に實地通
 りの順序を踐んで造る方が面倒
 な様で却つて樂で、さうして巧
 く出来揚ります、すべて實物實
 地といふものは、まことに順序
 よく巧く出来て居るものです。

丁度

龜



龜

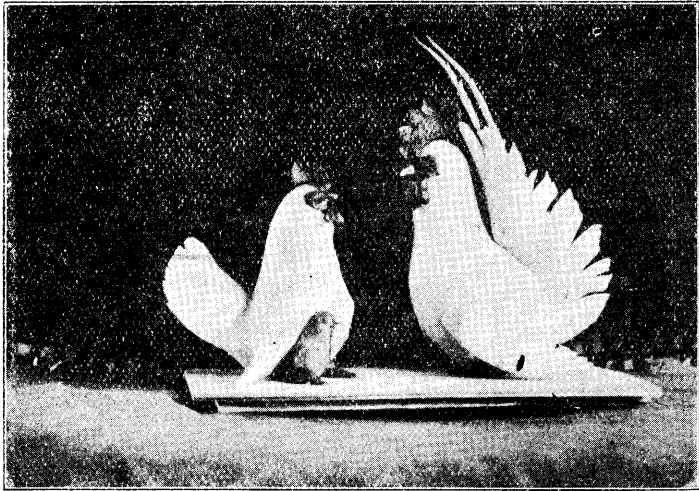
粉を薄く延ばして、

甲の切目は小刀の刃で入れ、首
 龜は黒新粉に青新粉を少許
 交せて甲から腹及び首に要る
 分量を測つてよく巻き込みを
 繰り返して、最初首だけに要
 る分量を取り分けて首の形を
 拵らへ、筋は小刀で入れ、眼
 は火箸で穴を開けて黒新粉を
 すき油をつけた指でよく丸め
 て入て錐の先で押へて置く。
 次に首に巻き附いて居るもの
 を拵らへて首へ巻き附け、そ
 れから胴を拵らへ背を摘み上
 げて高め、甲の端になる所は
 拇指と人差指で押し潰して薄
 くして、甲の縁へは茶色の新

の附所へは竹串の細いのを半分挿して、餘りの半分

眞に龜がその向へ往く姿になります、これも前申し

へ首を挿して胴と首をつなぎ、黒新粉で四足を拵らへて付けて錐でポツ／＼穴をあけ、板へ白新粉を一塊附けて、それを臺として其の上へ龜の腹を据ゑ、四足を板へくつつけて、足先の指や水かきは、小刀の背で指の間になる所を壓へて、壓へながら新粉の終、板に接する外側の方に近づくに随つて力を入れて押し潰して前へ引いて離せば、水かきが薄く出来て、小刀の觸らぬ所は指になります。それから龜の首を、向かせやうと思ふ方へ向かせて、足や尾の工合も、それに相當した向き工合、力の入り工合に直すと、



鶏

へ、尾は時によつて別に拵らへて尻へ竹串を挿した

●鳥

鳥は小鳥を拵らへて木の枝へ止まらせるともあり、鳥籠へ入れなども致します、鳥は首と胴とは一塊の新粉で拵ら

先へ挿し込んでつなぐともあります、尾の羽根の割
目は缺て切つて造り、兩羽を疊んだ頭、即ち羽の附
け根の所は裁縫缺の柄の丸く曲つた所を壓し附けて
造り、羽根の疊み目は小刀の刃で拵らへるので、小
鳥でなく、鶏になると、尾の末にある特に長い二枚
の尾は、別に竹串を齒で細く割いて心にして、それ
へ新粉を巻いて尻の所へ挿し込んで、上から刃を
下に向けて缺て新粉を切るの、鶏冠は松葉の束
ねたので突つついて鶏冠の様にするので、足は細
工の最初に、板片へ穴をあけて、それへ竹串を適宜
に挿して黄色の新粉を巻いて、板に接する所へは
指を新粉で拵らへて附けるのです。これらも姿勢は
矢張形が出来て了つてから附ける方が眞に迫りま
す。

● 猿

お猿さんは黒新粉に赤を少許と白新粉を交せて、
首胴手足の出来るだけの分量を拵らへて、其の塊か

ら首だけの分量を取つて頭全體の形を拵らへ、別に
赤新粉に白を交せて顔の所にくつつけて、額の出張
の下は玉蜀黍殻の錐の柄で引込ませ、皺や筋や口は
小刀で附け、鼻の穴は錐、耳目は火箸の先や小刀の
先の尖りて穴をあけ、耳朶は缺て頭の兩側から切り
出して拵らへ、次に胴を丸めて、手足を夫れから延
ばし出し、先づ手足の形を拵らへ、尻の所は赤と白
の新粉をくつつけ、座らせて桃を持たせるならば、
先づ座らせて首の乗る所へ竹串を挿して首を挿して
載せ、着物を着せ、それから桃を拵らへて持たせて、
その持ち工合で手足を曲げると、手足の曲りかたが
自然になつて無理が生まれません、これも初から曲げた
風にならへては巧く出来ません、矢張始めは伸ばし
た形に拵らへて、後でそれを曲げなければ眞に迫り
ません。手足の指は矢張小刀の背で指の間を壓へて
引込ませば指になります。胸の邊の凹凸などは矢張
玉蜀黍殻の錐の柄で拵らへます。

この他の動物又は人物を拵らへるにも、ほど同じ拵らへかたで、唯胴の割合に手足の短かい又は小さいもの、例へば鼠の如きは、手足は胴の兩側から缺て切り出す方が工合が宜しい。又頬の膨れた所などは、腮の下から竹串を突き入れて、竹串の先で膨らせるともありますが、それらのとは臨機いろ／＼の處置をしますから、特に云ふべき程のとはありません。細工の大體は凡を以上に申した位であるのです。

(四) 保存法

保存法は皆様お尋ねになります、私は細工をよくするといふとばかりを考へて居りますので、洲濱細工も色の工合が良くないから致しません、充分に新粉をふかせばよく保ちますが、これも細工が仕にくくなるから生ぶかしを用ゐます、唯前に申した通り細工に良い季節に上等の新粉、よく挽きよく篩ふ

であるものを用ゐますれば細工も仕易く保ちも宜しい、其の上に、常にすき油を水に溶かしたのを筆で塗つて、ガラス箱に入れて置いて下されば先づ保ちませうか、しかしどうせお子供衆の一時のお慰み物であるのが本来なので、私は細工をどうかよくしたいといふだけに丹精を凝らして居りますが、もう年が老つて了ひましたので、手が大層落ちまして、又細かな物や、面倒な物は、頓と駄目になりました。(懐天記)

淋しさに猿酒をくみなれにけり	曲	浦
園王に誰が白菊を配しけむ		
茶の花や小寺によりて發句の會	世	春
世話ずきの和尚が寺や菊の花		
初鮭のつきたる市や秋の霜	孤	燈
鬼灯の赤きに秋の霜白し		
大なるランプ吊せり秋の寺	縮	村
草花に人のぞき去る俳諧寺		

文字焼

藤田 たか

麥……火鉢……板金……油ひき……蠟……渡し木……匙……
管……はがし……湯沸し……屋臺車……組立行燈……ガラス箱
……炭……文字焼の原料……胡麻油……リスリン……細工の仕
方……蕎麥……蕎麥籠と鳥籠……猫……よい物……保存法と食
用法……文字焼の用途

文字焼とは古來の名、美術菓子細工とは氏の自から稱する所、他の文字焼業者のは知らず、氏のは實に寧ろ菓子細工と稱すべきものなのである。氏本姓は犬塚、祖先は東照公に軍に従ひ、三代將軍より犬塚の姓を賜はり、又庭前の桐花を取つて紋所とせよとて賜はつたので五七の桐花を紋章として西の丸表火の番を勤め、七十俵五人扶持鎗一筋の武士となつた將軍家の寵臣。たか子の祖父は根岸に住して上野の宮様の御醫者を勤めてた犬塚壽仙、其の姉は越後侯の國奥(在郷の正室)となつて、犬塚家は當時飛ぶ鳥を落す勢であつた。壽仙に男子があつたが、笛を好んで家を繼がず、越後に去つて行衛を知らず、家は長女に養子で繼いだ、これがたか子の父母で、父名は嘉藏、京橋區鍛冶町の近所の御屋敷の青物御用をつとめ、安政の地震に火が隣の按摩の家から出て丸焼に遭ふ

て竹川町に移つて矢張大家へ青物を入れて業とした。母は壽仙の長女でおさきと云つて、中々の女丈夫、維新の前夫に死なれてより新粉細工を始めて實母と四人の子とを養ひ、植木、蛇握り鯉、紙姉様、三角の干菓子等の細工に妙を得て、作物意氣を以て稱せられ、横濱開港の當初横濱に赴いて頗る外人間に持て囃され、たか子も往いて居ると牛藏、母と共に歸京して間もなく、再び火事に遭ふて神田松田町十五番地に移り、たか子は二十八歳の時、こゝより同區富山町の藤田家に嫁した。犬塚家はたか子の兄爲吉氏が繼いで、後鳥森の稻荷社傍に移り、母は殆んど終止新粉細工を業として壯健自ら樂み、一昨年九十一歳を以て病なくして終つたので、鳥森の婆さんと云へば人も知つたる老女丈夫であつたのである。たか子は竹川町に生れて、六歳父を失ひ、十二歳横濱にゆき、十三歳より文字焼を始めて今年五十歳迄約四十年間、今や斯道第一流の名手と仰がれ、母に劣らぬ女丈夫の氣あつて、又工夫に富み、性快活敢て城府を設けず、又母を見做ひ新粉細工にも堪能で、母は新粉の黒色に板昆布の黒焼を用うるを發明したが、たか子は之をおぼろ昆布の黒焼に改良し、又上等の細工には口紅挽茶等をも用ゐ、新粉はよくふかしたるを好んで用ゐ、四五年前新粉に砂糖を交ぜた所謂洲濱細工を發明した。これに細工をすればすき油を用ゐずして艶も出て手へもくつ附かず、かびも割れも出ず保存に堪へることを發見した。しかし原料が高いので安く賣れないから近來はやめて居るとの事である。で、近年迄は冬は文字焼、夏は新粉細工をして居たが、近年専ら文字焼専門となつて、平日は日本橋本町人形町日本橋前後白木屋横町等に、大道店には惜しき無類の妙

技を示し、又毎月日本橋西がしの地藏の縁日、毎年十一月のべつたら市には必らず出て、其の技を奮ふ。又屢日本橋俱樂部に喚ばれ、又園遊會を始め諸方に聘せられて、其の蕎麥の籠入は特に天下一品と稱せられ、鳥籠、猫亦無類の譽を得て居る。夫は大阪落城の砌、中村將監と共に南埼玉に來つて大里を開いた藤田仁左衛門といふ豊臣家の裔で、家は世々仁右衛門を稱して、夫は次子で運次郎と云つた。張物職を業として店を開いた事もあつて、其の時はたか子も一時文字焼をやめたが、其の時の外は、たか子は矢張文字焼と新粉細工を以て自活し、夫は九年前に世を去つて、四人の子も三人まで亡くなり、獨り當年二十歳の龍太郎氏が今は神田錦町の越後屋呉服店に勤めて居られる。兄弟も七人の中三人は早く亡くなり、他の二人も亦世を去つて、今はたか子と兄爲吉氏だけになつて、兄は芝愛宕下二丁目二番地に住つて居られる。

(一) 文字焼の道具

文字焼に用ゐる道具は臺、火鉢、板金、油ひき、甕、渡し木、匙、管、はがし、湯沸し、屋臺車、組立行燈、ガラス箱、私の用ゐて居ます道具はこの位のものです。

● 臺

文字焼は私は立つて仕馴れて居りますので、偶々座つて焼きますと自由に體が使へませんので巧く出来ません。立つて焼きますから火鉢に臺がいりませう、臺の高さは二尺が程度で、臺と火鉢との間へは二分八分程のすかし臺を置かないと臺がわるくなりません。

● 火鉢

私は兎角何でも手製が勝手が宜いので、この火鉢も汚なくなつて居ますが、手製ですからこれを使つて居ます。この火鉢は石炭箱を二つに仕切つて居たので、長方形で、長さが一尺七寸三分程、幅が一尺三寸六分程、高さが四寸六分程で、底に紙を敷いて、其の上へブリキの盆壹枚を上向け、更に稍小さいブリキの盆を下向けて其の上へ伏せ、短かい方の縁の内側へ二箇所宛堅に木を打つて、それで止まる様に、框を入れます。框は長い方の一方と短かい方の一方、即ち三方、火鉢の縁から底までの厚いブリキ板

て、そのブリキは縁の上まで充分に冠つて、縁の上には短い方の縁に十二三本づゝ、長い方の縁の上には二十本前後も、釘が頭を並べて一列に打つてある、自分の方になる長い一方の縁も同くこの框にくつついて居て、これにも同様ブリキを張り釘が打つてある、この一方は別に火鉢の縁から四五分も上へ出る様に切つたブリキ板を底の所から縁の上までお



か た 田 藤

つ附けて、左右の餘分を左右の縁の方へ折り曲げてある。これは自分の方へ火氣の來ぬ爲めの火除けです。この火除けと框との間んで居る中へ一杯にはいる様に厚いブリキを折り曲げておとしを拵らへて、その一隅へ、おとしの動かぬ様にブリキの小さい片を直角に曲げて押へこ入れます。おとしは下をすぼませ、上を開かせた形で深さが三

寸程、これへ灰壹寸許を入れ炭を入れ、框の四隅へは五分程づゝの木片の枕を置ます。これは板金は油をひきますと引込みますから、引込まぬ様に置きますので、本来はこの枕は縁の中程へ置いて、四隅から空氣を取る方がよいのですが、まだ手が届かないので四隅に枕を置いた儘で使つて居ります。おとしを入れて出来あがつた火鉢の中の廣さは、長さが一尺三寸、幅が一尺五分あります、この中へ火を起して、上へ板金を載せます。これは普通に用ゐて居ます大さで、澤山焼く時には更に大きいものを用ゐますし、數も二つも三つも用ゐますが、多くなると、どうも手がまわりませんで、よいものは出来ません。

●板金

これも澤山焼く時には大きいのを使ひ、數も二三枚も用ゐますが、普通右の寸法の火鉢へ掛けて用ゐますのは、長さ一尺五寸、幅一尺二寸、厚さ壹厘餘、

短い方の一方の縁の中央に板の面と並行に箆笥の引手と同じ様な形の手が裏から打ち附けてあつて、それが短い方の縁の中貳寸貳分を傾して居ります、この手が以前は面の上に附て居て大層不使でしたから直させまして宜くなりました。板金も手も共に銅で、この板金の上へ文字なり畫なりを焼き附けるのですが、年中使つて居ます上、決して鹽氣を用ゐませぬから綠青の出る患はありません。この板金が悪いと細工がうまく出来ませんから、上手な人に打つて貰ひますので、普通の板金は中央が薄くて縁が厚うございいますが、それでは細工物が焦げて焼け過ぎいけませんから、私のは縁を薄くして中央に近づくに随つて段々極く少しづゝ肉が附いて居ります。この板金はあまり打ち直しなどは致しません、この板金の面へ手をつけばむらになりますし、上へ物を置けば疵が附きますから、心得のない人には觸らせぬ様にして居ります。板金と火鉢との間へは五分位の

すかしを要します、前に申した火鉢の框の釘や枕木などはその爲めて、その釘と枕木の上へ手を右にして板金へ置きます。

●油ひき

これは板金へ胡麻油をひくに用ゐるもので晒半反程を固く巻いて一方の巻口と周圍とを包むて鬱金の切を袋縫にしたもので、巻口の幅二寸六七分、高さは三寸位に拵らへます、油をひく時には筆で胡麻油を袋の冠つて居な



砂 高

い一方の巻口へ塗つてそれで板金の面へ油をひくのです。

●甕

これは普通の水甕の様なものて宜しいが、普通に口径一尺程の五升入の甕を使ひます、忙しい時には、これを幾個も使ひます。

●渡し木

これは甕め口へ一文字に横に渡して、匙の背に附かうどん粉の液を取るものですが、始め木であり

ましたが、どうも工合が悪い、いろ／＼工夫の末、今日では竹を弦月形に割り取つたのを用ゐて居ます、長さは九寸五分ほど、竹の厚さが一分半程のもので、弦月形に幅をとれば一寸

七分程で、これを左右に一文字に甕の口へ渡して竹の皮の方を自分の方へ肉の方を對方へ向く様に、左右甕の縁に掛かる所を竹の口を凹字形に切つて、その引込んだ所で甕の縁を挟む様にしました、これで、外さうと思へば下の方を對方へ押せば樂に外れまして、チャンと掛けて置けば決して外れて甕の中へ落ちるとがありません。それから左右から取つて中央に當る所を二寸五分位半月形に反

り回めて、その回みの一番深い所は二三分の深さに致します、こゝで匙の背を撫で、うどん粉の粘つた液を去るのです。



文 字 焼 白 の 作 姓 名

● 匙

匙は圓く盃形の眞鍮のもので、徑二寸三分、それに八分程の首が附いて柄があります。柄は普通にはらを竹を用ゐますが、迂つていけませんから私は挽物にして、それに悉皆籐を巻きました、挽物の柄長さ五寸程、徑五六分位です。

● 管
これは人物の鬚などを書く時に使ひますので、矢張眞鍮製で、器械に油をさすものを用ゐます、先に

徑三四厘位の穴があつて、元が四五分の口徑の長い漏斗形のもので、鬚の様な細いものを書く時には、廣い口から液を流し込んで、細い口から出る液で書くのです。

●はがし

これは焼けた文字焼を板金から剥がすもので、今川焼などにも用ゐるものですが、これは大小五六本も備へて置きまして、銅のも真鍮のもあります。はがしはすべて柄が先が細く、元へ段々廣く厚くなつて、元の靴の踵の様な形で先が開いて薄く刃物の刃の方の様になつて居るものが附いて居るもので、柄も先も一つの金屬が打ち延ばしてあるのです。この柄

の元、先の附いて居る際の少し手前が厚いほど良い



龜の窩臨子かた

はがしなので、さういふのは滅多にありませんから、有る時には差向き不用ても金物屋から買つて置きます。大きいのはがしは柄の長さ四寸から四寸五分位、先の長さが壹寸六七分から二寸五分迄位、小さいはがしは柄の長さ三寸から三寸七分位、先が一寸から二寸位迄で、大二本に小三本位づゝ同時に使ひます。小さい方のはがしの柄の先の細くなつて居る所は、管を使ふにも及ばぬ場合に、烏渡細い鬚などを書く時に管の代りに用ゐるとががあります。其の時には左手に液を入れた匙を

持つて、右手で小さいはがしを逆（さか）りに持つて、柄（た）の先へ液（あま）を鳥渡（ちよど）付けて筆（ふで）へ墨（すみ）をつけて書く様（やう）にします。又はがしの先の刃物（ばもの）の刃（やう）の様（やう）になつて居る所（ところ）で極々（ごくごく）細い（ほそ）い、管（くだ）でも書けない筋（すぢ）を書くところがあります、これも同様に液（あま）を鳥渡（ちよど）付けて板金（いたがね）の上へ筋（すぢ）をひくのです。ですからはがしは又はがし以外の仕事（しごと）も致（いた）します。

●湯沸し

これは文字焼（もんじやき）をするには不用（よまら）ず、召（め）し上がる方に湯（ゆ）を差（さ）上げたり、又は自分（おれ）用（もち）にもする爲（ため）めに工夫（くわふ）致（いた）したもので、銅製（どうせい）で富士山形（ふじさんがた）になつて居（ゐ）る、上に首（くび）が附（つ）いて、口（くち）には木（き）の栓（せん）を挿（さ）し、栓（せん）の中央（ちゆうかう）に一つ穴（あな）をあけて湯氣（ゆけ）をぬく様（やう）にしてあつて、肩（かた）には水（みづ）注（つ）の手の様（やう）な手（て）を附（つ）けてと置き（お）きます。底（そこ）は平（たい）で、板金（いたがね）の上（うへ）へ置（お）けば湯（ゆ）が沸（わ）く様（やう）に拵（こし）へましたので、内部（うちぶ）にはしろめを敷（敷）いてあります、底徑（そこぢやう）が三寸八分（さんすんぱつ）、口徑（くちやう）が七分（しちぶん）、首（くび）の長さ（ながさ）が八分（ぱつ）、富士山形（ふじさんがた）の

高（たか）さが三寸（さんすん）ありまして二合（がふいり）入（い）ります。これは水（みづ）の儘（まま）の時（とき）は栓（せん）をした儘（まま）で栓（せん）の穴（あな）から出（た）しますが、湯（ゆ）の時（とき）には栓（せん）を取（と）らなければ湯（ゆ）が走（は）つて火傷（やけど）を致（いた）します。

●屋臺車

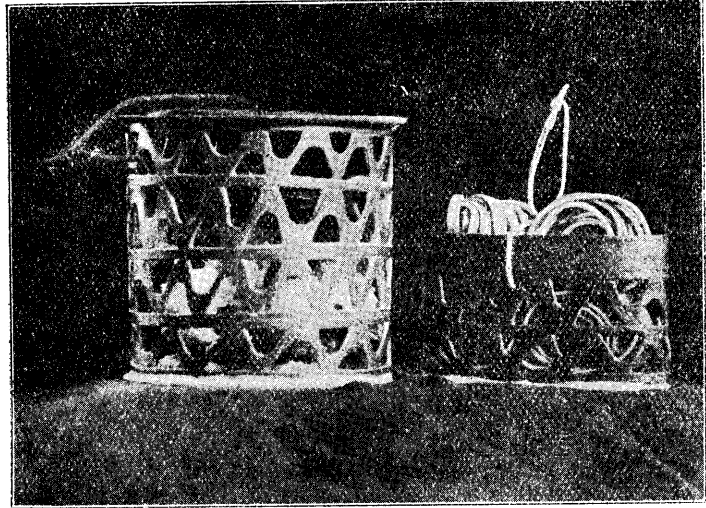
これも私（わたくし）のは少し工夫（くわふ）を致（いた）して圖（ず）を引（ひ）いてやつて拵（こし）へて貰（もら）つたのですが、拵（こし）へる人（ひと）が鳥渡（ちよど）間違（まちが）へたので、今（いま）に使（つか）ひ難（がた）くて困（こま）ります。車（くるま）は一尺（いちせき）位の直徑（ぢやうけい）のが左右（さゆう）二つ宛（あ）つて居（ゐ）る、屋根（やね）は始め（はじめ）亜鉛張（あてんぢやう）の木製（もくせい）のもので、雨（あめ）の時（とき）には庇（ひさし）を出（だ）す様（やう）になつて居（ゐ）ましたが、子供（こども）衆（しゆう）を負（お）ふつてお出（い）での方が、よくこの屋根（やね）の庇（ひさし）で子供（こども）衆（しゆう）の頭（あたま）を打（う）ち附（つ）けて子供（こども）衆（しゆう）を泣（な）かして氣（き）の毒（どく）です、考（かんが）へまして、始め（はじめ）の屋根（やね）を取（と）つて了（しま）つて總（そう）ゴム切張（ぎれぢやう）に致（いた）し、裏（うら）には雲齋（うんさい）をつけ、自分（おれ）の居（ゐ）る所（ところ）だけを除（の）けて、三方（さんぱう）へは庇（ひさし）にもんぱを入（い）重（あ）ばかり入（い）れましたから、柔（やわ）かくて、その後（ご）は子供（こども）衆（しゆう）を泣（な）かせるには無（な）くなりました。自分（おれ）の居（ゐ）ます所（ところ）へは扇骨形（あふぎほねがた）に竹（たけ）を集（あつ）めまして上（うへ）へ幌（ぼろ）を附（つ）けて平日（へいじつ）

は疊んで置ける雨覆に致しました。臺の前客の立寄

致したので、便利組立行燈と命けて居りますこれは夜分仕事をする時に鳥渡ラン

られる方へは小さい手すりを拵らへて火鉢に觸つて火傷をなされぬ様に致し、この臺へ火鉢の低いすかしを入れて据ゑて焼きますので、私から申して右側甕を置く所にも、手すりから少し退つて板圍が拵らへてあります。臺の下へは小道具や菓子類の箱を入れる様になつて居ますが、後の車の側へ柱を拵へられたので使ひ難いので、今五六寸車より後へ柱が来る筈に注文したのを間違つたのです。屋臺車は大體こんなものです。

●組立行燈



籠 蓆 と 籠 鳥

て先が釘の首に結んであります、第三枚目の第四枚

これも見苦しうはございますが、私の手製で工夫

目に接する端にも同様にしてあります。第四枚目の、第三枚目とくつついて居ない一方の端の外には同じ糸の輪が附いて居て、それが第一枚目の、内側に釘の附いて居る縁の外側に出つ張つて居る釘に掛かつて四枚のガラス板は角燈の四方を圍むガラス戸の形になります。それから別に丁度其の角燈の底になるだけの大さの四角な板の上へ更に小さい四角な板を附けて、その上へブリキを折り曲げて佛の坐の蓮華の様にして、中央に釘を逆にして、蠟燭立にしてあります。このブリキを折り曲げたものは、裏から釘を打つて蠟燭立にしてあるもの下に更にブリキが一枚あつて、それで蠟の漏らない様に受けて居るので、上のブリキを折り曲げて下のブリキへ冠せて、四隅へ釘を打つて止めてあります。この蠟燭臺の大きい下の方の板の三方の木口には中央に各一本宛釘が出て居て、これがガラスの圍の第一第二第三枚目の框の各下の縁の中央にある小さい穴へ刺さつて、

(九〇)
 第一枚目と第三枚目の端の釘は、蠟燭臺の板の残の一方の木口の左右に寄つた所にある二つの穴に刺さつて、これで蠟燭臺とガラスの圍は確乎くつつき、第四枚目のガラスは戸になります。それから第一枚目と第三枚目の上の縁をつなぐ紐の兩端が、各の縁の中央に附いて居て、それがガラスが折れて角燈の形になると角燈の提げ紐になる、尙上の縁の所へ四角なブリキの盆へ空氣拔をつけたものをはめて落ち入らぬ様にすれば、大抵の風は通らぬ、蠟燭の角燈が出来まして、遠目は暗いですが、近くで細工をするには相當に明るくて役に立ちます。

● ガラス箱

これは極く鳥渡の工夫で、唯蓋のガラスのはいる所を冠せ蓋にしたゞけですが、普通は皆ガラス蓋が唯載つて居ますので、ひどい風には飛ばされますから、かう致しました。箱は檜で、これへ入れて置けば文字焼なども濕りません。道具についてのお話は

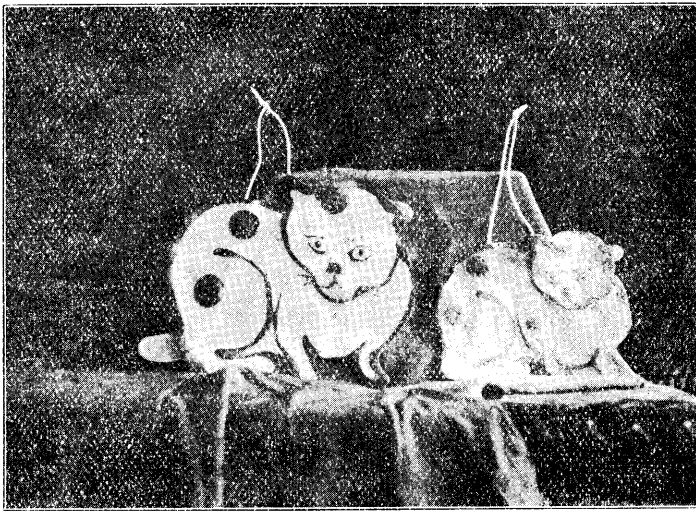
この位くらゐ

(二) 文字焼の材料

次に文字焼もんじやきに入用いりような材料ざいりょうは、炭すみと、文字焼もんじやきに焼く濃こい液じやくと――
胡麻油ごまのあぶらとリスリンとです。

●炭すみ

炭すみは佐倉さくらの切炭きりすみの徑わたり三寸位さんすんぐらゐの長ながさ三寸五分位さんすんごぶんぐらゐに切り揃そろへて乾ほして使つかふので、火鉢ひばちのおとしへ壹寸程いちすんほど灰はいを入いれた上うへへ左中右さちゆうみぎの三行さんぎやうに並ならべるのですが、周圍まわりは少すこし明あけ、四隅すいよくは炭すみを、割われたもの、缺かけたもの、又または右みぎの切炭きりすみを二つ割わりにしたものを置おきます。急いそいで火かをおこす時ときなどには、中なかの行ぎやうの眞中まんなか二三個この外ほかはすべて右みぎの切炭きりすみの



二つ割わりにしたのを、割わつた一方ひがうの角かくの上うへになる様ように、

猫

丁度てうど刺身さしみを並ならべた様ような工合ぐあひに並ならべますと早はやく火かがおこります。それから平ふ常たんでも急いそぐ時ときでも中なかの行ぎやうの中央ちゆうしんを中心ちゆうしんにして、左さ右みぎへ長なが方形かくがたに炭すみの上うへへ灰はいを着きせて、その上うへへ新あららしい薄うすくて輕かろいブリキの板いたを壹枚いちまい載おせて置おきます、古ふるいのは重おもくていけません。これも左さ右みぎへ長なが方形かくがたで長ながさが六寸三分ろくすんぶぶんあり幅はばが五寸二分ごすんにぶん程ほどで、着きせた灰はいの廣ひろさも丁度てうどこの下した一杯位はいぐらゐです。これは火かといふものは兎う角中央かくちゆうしんへまわり易やすいものですから、中央ちゆうしんの火力くわりのよを他ほかと平へい均きんから、この上うへに又また板金いたがねも中央ちゆうしん

させる爲ためめに弱よわめる工夫くわうで、

ほど厚くしてあるのです。火が強いと焼物がどうしても割がれていけません、割したのは又板金へくつつきませんが、自づと割がれたのはどうしてもくつつきませんから、火が強いと細工中に一方が割がれて来て細工が出来ませんから、火力には餘程注意を要します。それから又いつでも火をおこすのは四隅から起し始めて、中央へは可成火があとでまわる様になります。炭を用ゐるに四隅だけ割れたものや缺けたものを用ゐますのは、即ち火をおこし易くする爲です。これで炭は丁度火鉢の縁の高さまであつて、板金と火との間は枕木の高さだけ即ち四五分程隔つて居ります。大概朝の六時頃から夜の十二時頃まで、御飯を戴く外は焼き通しますが、それでも炭は朝入れた儘繼がなくて宜しい。

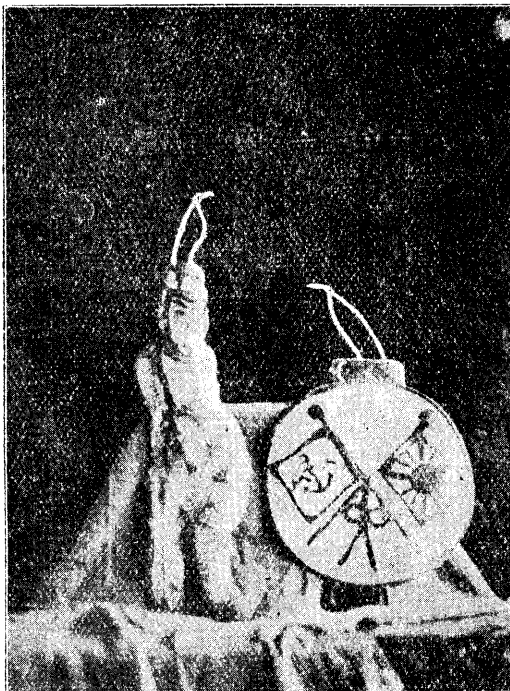
●文字焼の原料

文字焼を焼く原料は、餛飩粉又は米利堅粉と、鶏卵と、砂糖と、水飴とへ水を交ぜた液で、其の分量

は、一貫目の粉に砂糖七百匁、鶏卵が大きい地玉の上等ならば拾個、小さければ貳拾個ほど、これに鶏卵一個位の分量に水飴を入れて、始め豊後柄杓の三合五勺位はいるのに四杯位水を入れて、まゝこの出来ないやうに掻き廻して、よく粘氣を出して、跡から更に半柄杓程水を割つて、延ばして使ひ頃に致します。寒い時はこれで宜しいが、暑い時には、總鉢で水一杯程少く致します。これは蕎麥の籠などを拵らへる分量ですが、骨の折れる細かい細工をする時には砂糖を一割即ち百匁餘計に入れて八百匁とし、鶏卵も大きいのを十五程入れます。砂糖の分量が軽い程液が板金の上へだらしなく擴がりますし、砂糖が多ければ多い程板金へ流しても止て居ります。又砂糖が少ければ板金へのくつつきがわるくて自と揚つて割がれて來まして細工になりませんから、砂糖六百匁では細工がちと難しうございます。ですから人物などの細かい細工物の時には殊に砂糖を多く

する譯です。又砂糖が悪ければ粘氣が薄うございませ
すから、砂糖は皆砂糖の上等の「美」といふを用ゐま
す、よい砂糖は甘味は尠いが風味が宜しい、悪いの
は甘くても風味がないか

らいけません又艶も砂糖
で出来るのです。饅頭粉
は日本粉の上等で玉川と
いふのを用ゐます、日本
粉は上等になる程粘氣が
強うございます。米利堅
粉は、あまり上等は粘氣
が少うございますから中
品の方が粘氣があつて宜
しい。水飴は上等のさら
し水飴を用ゐます、これは細工物が板金から離れ易
くなる様に用ゐますので、水飴を入れるから粘氣が
強いと思れる方もある様ですが反對で、粘氣は重に



砂糖で出来るのです。鶏卵は拵らへる物によつて白
味計りを入れるとがあります、白く出したい時など
は、さう致しますと、どうしても黄味の交つたもの
よりは白くなりませす、

黄味は焼けると赤くな
ります。で、拵らへる物
次第で二通りにも三通
りにも液を拵らへませ
す、普通は一通り拵ら
へませすだけです。鶏卵
が多いと、どうしても
液が板金の上へ往つて
開きます。右の次第で
すから分量が違へば板
金へのくつつき方が違ひますから、一つの細工物に
分量を違つた液を用ゐると、火力の強い時と同じく、
細工中ある場所が剝がれて來て細工が駄目になり

燈 提 と 隊 樂

ますから、一つの細工には、どうしても同じ時に拵らへた同じ分量の液を用ゐなくてはなりません。又液の濃淡は細工物次第です、即ち液が濃ければ板金の土へよく止まり、淡ければ開きますから、細かい細工には濃いのがよく、大きくて細かな細工のはいらないものを拵らへる時には淡い方が宜いのです。甕はすべてこの液を入れるに用ゐます。

● 胡麻油

これは細工の前に板金の面へひくので、炭が相當におこつたら板金を載せて、これをひくのです。分量は極く僅かて宜いので、普通の猪口に一杯もあれば三箇月位使へます、油が多いと細工物が細工中に剝がれていけませんから、極く少量ひきます。これは壺へ入れて置けば宜しい。極く宜いのを壹錢も買へば三箇月もあります。

● リスリン

これは火傷をした時の用意で、火傷をしても直ぐ

リスリンを附ければ赤くもならないで直ります、直ぐ二三度も塗り附ければ一時間程経つと何ともなくなりません。又園遊會などの時に戸外で焼いて居て蟲にさされるともありますが、其時にもリスリンを附れば直りますから、リスリンは文字焼をするのに附き物です。文字焼に入用な材料はこれ位です。

(四) 細工の仕方

愈細工にかゝりますには、以上に述べました通りに準備を致しまして、先づ匙でよく液をかきまわしてよくかき交せて、匙へ半分過汲んで、匙の背に附いて居る液を渡し木の竹の中央の凹へ摩り附けてよく去つて、それを右手に持つて板金の土へ持つて往つて、匙を少し左に傾けて、そこから流れ落ちる液で畫なり字なりを書くので、細い筋などは小さいはがしの先か柄の先へ液を附けて書き、又管をも用ゐます。次に二三の細工の例をお話致します。

●蕎麥

細工は一番簡單で、それで中々難かしいのが蕎麥で、向つて左から始めて右へ一文字に蕎麥の太さ程に流して丸く曲げて左へ又一文字に流して丸く曲げて又右へ流し、段々之を繰返せば長さ幾尺にでも出来ませんが、途中で切れてはいけなしいし、太細があつては見苦しいから樂な様でむつかしいものです、流し了つて止める時には匙を一度戻して傾けた方を強く上げると液が切れます。流し了つたら間もなく右手にはがしを持つて、丸く曲つた角二つ三つにはがしを當て、左手を軽く添へて左へ丸く輪の様に巻き取つて割がします、さうすると板金にくつついて居た方が上へ出て、美しい蕎麥の形が出来ます。この蕎麥は出来たてよりも四五日經つてからが味が宜うございます、又口へ入れて直ぐには、さう美味くありませんが、よく嚼んで居ると味が出て来ます。又この蕎麥は胸の焼ける方はその時二三寸召上かれ

ば直ります、お腹の空いた時にも一本程食べれば堪へます、お腹のくちくなつた時にも、少し食べればよく直ります。すべてこの文字焼といふ焼物は手當りが硬いから美味くもない様に召しあがりつけぬ方は思はれますが、少しづつ召しあがると段々よい風味が出て参ります。

●蕎麥籠と鳥籠

右の蕎麥を入れる籠も焼物で拵らへます。これは先へ細く一本左から右へ七寸餘の筋を匙で流して拵へて、すぐその下へそれにくつつけて幅の廣い一文字を左から右へ流し、その下へ又すぐ左から細い一文字をくつつけて右へ流し、上の二つの筋の盡きるところで直角に自分の方へ四分度折り曲げて、又左へ直角に折り曲げてその儘左へ一文字に細い筋を流し、左の端、上の三つの筋の盡きるところで又直角に自分の方へ折り曲げて、四分程で又直角に右へ折り曲げて、その儘右へ一文字に細い筋を流し、右の端を自分の

方でなく對方へ直角に折り曲げて上の端の角へ維いて匙を止める、それから左の上の幅の廣い筋と其の下の細い筋との間の空いて居る所へ匙を持つて往つて細い筋の角から上の廣い筋の角に向つて垂線を拵らへ、上の角の所で約三十度の角を作つて斜めに下の細い筋につなぎ、今度はその筋と約六十度の角を作つて上の筋に向つて筋を流し、又それと六十度の角を作る筋を下筋につなぎ、之を繰返して右の端に至つて止め、下の段もほゞその通りにして、間もなくはがしを左手に取つて、焼物の左の端を一寸五分刻がして裁縫鉄の柄の様な曲りかたに曲げて端を左手に持ち、はがしを右手に取り直して、手早く右の端を剝がして左の方へ曲げて持つて往つて、端を左の端の上へ三分位冠せると、まだ右の端の板金にくつついて居なかつた方は生焼ですから、左の端の板金へくつついて居た方へてもよくくつついてつながる、それから右の曲りを左の様にして、立てると

籠の形が出来、それから幅一寸二分位、長さ三寸位で、狭い方の二つの縁と四隅とが丸みのある小判形の平つたいものを流して拵へて、籠の下の縁即ち筋の細い方の下の方を液の壘の中へ鳥度浸けて、直ぐに小判形の上へ附けて、暫時焼いてから、小判形をはがして剝がすと底になつて籠が出来あがる。さうして上になる幅の廣い所は中央の廣い筋と上下の細い筋との間には判然細い毛筋程の筋が附いて、丁度籠の口に見える、この毛筋程の筋は自然に出来るので、液を流す時刻が少しでも違へば前に流した液と後に流した液との間には、いつもこの筋が出来ますから、この筋の出来てわるい物は可成匙から一度に流して手早く形にしてしまふと必要です。この籠の中へ蕎麥を入れて、長い方の二つの上の縁へ紙振をかけて、上で結て提げられる様にしてお土産に致します。鳥籠を拵へるのもほゞ同様の仕方、只丸く曲げて、まづ底になる丸いものを拵らへて、綿製の高さ一寸四

五分の美しい鶏の雌雄などを持つて来て、小さい判形を焼いて鶏の足へ液を附けてそれへくつつけ、割がして、液で雌雄を丸い底に附け、上へ籠を冠せて附けて、天井へ更へ丸いのを拵らへて蓋にすると鳥籠が出来、普通徑も高さも三寸位のを拵らへまして、赤青の毛糸などを合はして天井の裏から籠目を潜らせて提げて、これもお土産になる様に致します。

●猫

猫は寫真にある様なのをいつも焼きますので、これは先づ耳を書き顔の形をかき、次に鼻、次に眼、次に鼻の下即ち口、次に眉毛、鬚、次に體、次に前足、次に腰の筋、後足の先、最後にぶちを書いて、其の儘一時間程置いて、體全體へ一面に液を流して膏の筋の間を埋めるのですが、これも下手に埋めると前に焼いたのが割がれて滅茶苦茶になりますから埋めるのが又むつかしうございます。それから裏へ紙振を人の字の様にして兩方とも三處程液でくつつ

けて、間もなく割がして裏返して裏を鳥渡焼くと紙振は確乎くつつきます、かうして出来あがつたのが寫真の様なもの、顔を左へ書き、尾を右へ書いたのが出来上つて割がすと反對に寫真の様になるのです。寫真で目鼻口其の他すべて筋が黒いのは地よりも一時間餘計に焼け焦がしたから、これらの筋は太いのは匙から流す手加減で書き、細いのは小さいはがしの先や柄の先、又は管で書いたもので、別に下繪をかくまでもなく、猫は好きで二三年前まで飼つても居ました上手馴れても居ますから、すぐ板金へ書きます。寫真にあります左の大きい方は背丈が五寸餘（向つて左の耳から向つて左の前足まで）、向つて右の耳の角から尾の先まで斜に測れば七寸三分、ぶちの徑が六七分位、右の小さい方は背丈が（全上の測り方で）三寸七分です、普通拵へますのは大概この位の大きさです。

右の通り書いたのと反對の向に出来揚りますから、

文字なども左字に書かなければならないので、唯さへ巧く出来ないのが愈拙くなります。(記者云寫眞の自作姓名も即ち左字に書かれたので拙い所てなく中々巧なものである)

●よい物

右の猫は形物とはいへ簡單な物ですが、よゝい物となると中々骨が折れます、本来不器用な上、繪を習つた事などは尠しもありませんから畫らしい物は出来ませんが、唯燒物といふだけに皆様も御覽下さる譯なのです。それとても何でも出来るといふ譯ではありませんし、久しく焼きませぬと忘れまして作り難うございます。折々焼きますのは韓信股潜りや、高砂、今少し簡單なものはお福さんなどです。これらは孰れも畫家に下繪を書いて貰つて、それを見てやつて見え覺えたり、又は、自分で蕎麥屋さんなどの井の畫などにも面白いのがあると寫し取つて置いて焼いて見たり、新聞に出て居る畫を見て焼い

て見たり、反物の帶紙にも面白い圖様があり、子供用の繪草紙にも面白いものがありますから、折にふれて集めたり寫したりして保存しては置きますが、どうも下らない用に追はれて皆々試めして見るとはまだ閑がなくて出来ません。(記者云寫眞の龜の圖は氏がどこかの金襖にあつたのを見て見とり寫しに寫して置かれたのを撮影したもので氏の苦心を伺がふに足る)一度新聞に出て居た竹根の花いけに活花のしてある畫を焼いて見たとがありました、花などは流儀流儀があつて難かしいものですから、知らないものが、うつかりやるとお笑草になるばかりですからその後は焼きませぬ。畫は一帶に眞面目なものよりも滑稽染みた物の方がまだしも面白く焼けます。どうも燒物の事ですから品行よく參りませんで、いけません。高砂などは板金一杯に焼きますが、お人によつてはこれらを衝立にはめたり額にしたりして面白がつて居られます。かういふ大きいものは出来

揚つても縁が凸凹になつて平らになりませんが、すぐ之を壓へるとバリ／＼と毀れます。これは四五日経つてからでも、餅網へ載せて裏を炙りますと砂糖が還つて柔かくなります、それを平たいものの上へ載せて壓へますと平らになつてよくなります。韓信股潜りなどは曾我の書をうつしたもので、これと高砂などが、これまで割合に多く焼いた大きいもので、客が二三人船に乗つて釣を垂れて鯛の揚つた所など即ち釣舟なども以前はよく捨らへて釣糸は本統の糸を附けて鯛やたこを文字焼て致しました。又乳母車、飛び狐、唐獅子、狸、網船、筏船、小槌に鼠、お供に鯛、兵隊さん、樂隊、提灯、石燈籠、桃なども折々致しますが、普通大道賣では甲も書かぬ、形だけ捨らへた龜などを焼きますので、これらは一日に九百位出来ます。右に申した繪の様なものは重に御座敷や園遊會などでなくては出来ません。簡単なものはさういふ事はありませんが、高砂などいふ

大物になると、多く焼いた後でなくては巧く出来ません、焼き始めなどに焼きますと細かい所が、胡麻油の強い爲めに割がれていけません、ですから已むを得ない時には油をしいたら一度拭き去つて使ひます。同じ高砂でも折々婆さんに龜を持たせたり、いろ／＼の事をやります。手のかゝらない大きいものは匙でやるよりも手鍋の様なものへ液を入れて一時に流して捨らへる方が手際よく焼けます。細工の仕方は先づこんなものです。

(四) 保存法と食用法

私の文字焼は召食がるにしても前申した如く、少し目が経つてからの方が味が出ます、高砂猫の様なもの裏から餅網で炙つて召食すれば美味く召食がられます。直ぐに食べてよいのは櫻餅即ち厚焼のおかしわで、これは養甘などを餡にして丸い文字焼を二つ折りにして抱かせて向島みやげの櫻餅にして籠

入などに致しますが、これだけは直ぐでも美味うございませぬ。この焼物は幾日措きましても折々裏から炙つて戴けば決してかびも致さず、雨の濕氣も食ひませぬ、現に寫眞の猫の右の小さい方などは一昨年焼いたのですが、尾が缺けたゞけて何ともありません。

(五) 文字燒の用途

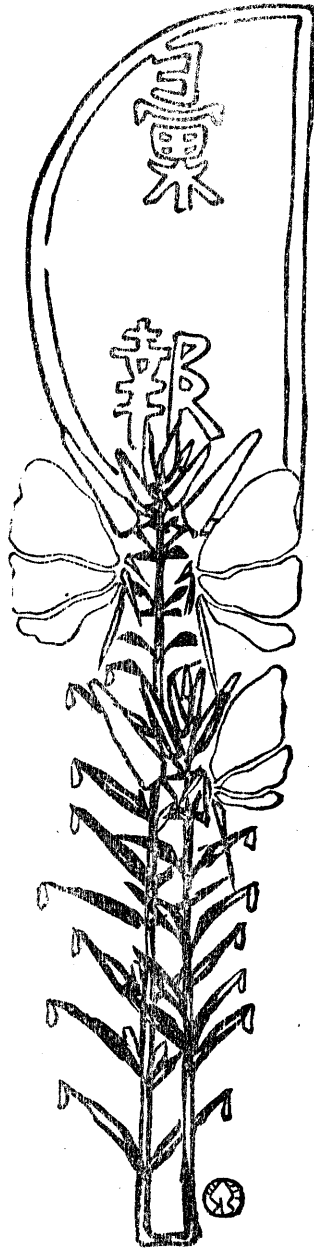
文字燒は右の様なものですから、賣出しなどの福引の當り物には形物を出し、普通には籠などを出しますと面白からうと思ひます。又園遊會庭の攝待、お座敷のお慰み、座敷開き、お茶の會、花の會、御祝事などの時その他すべて人を招く時に、席上て拵る所を御覺に入れると又一しほ面白からうと思ひます。オヤこれはとんだ自分勝手を申しまして濟みませぬ。まだ洲濱細工、便利汁注ぎ、便利夜具戸棚、新案水甕の臺など、いろ／＼考へた事もありますが、餘事は他日のお話に致しませう。

(懷天記)

楡 笠

同行七人

發 杖	ゆく秋の日かげさびしや楡笠	露	石
虎 溪	鐵鉢に菊を添持つ僧もあり	全	
菩 婆 橋	柚人の袴ふるへば落葉哉	全	
須 原	二ツづゝ重ね布團や山の窟	全	
寢 覺	秋さびし花漬に知る木曾の窟	全	
鏡 原	冷かに寢覺の床の淵の色	露	石
奈 其 井	新蕎麥に木曾の泊りの尋常ならぬ	全	
上 諏 訪	串にして小鳥焼くなる櫓火哉	全	
不 二 川	山籠の秋こぼしゆく紅葉哉	全	
奥 津	ゆく秋やさびしき里のお六師	露	石
	うつくしき人のほこびし火桶哉	露	石
	紅葉ちる奈其井の窟や薄氷	真	砂
	あふがはや行手の方に幸あれと	全	
	上と下との諏訪の神々	全	
	不二川を下る舟人いざとほん	露	石
	奥の紅葉の濃き歟薄き歟		
	木曾路來て冬あたゝかに清見湯		



文士劇

●『東京毎日』の演劇會 前號にも記して置た『東京毎日』の演劇會は十月廿八日を以て、其の紙上に花々しく發表せられた。同紙は先づ社説に設置の趣旨を述べ、幹部技員は別に其の抱負を告白し、演劇會規約等を發表したが、其の綱領の要目は、特殊の階級より演技者を出して梨園職業の地位を高めんとを期すると、高き意味の劇題を撰みて社會風俗の上に醇良の感化を與へんとすると及び男女分業の意義

に基き女優を養成すると等であるが其のうちに「演技者の徳性を涵養する」の一項を設けたると、制裁の一條を置いて「素行上に物議を受けたる技員は除名す」との罰則を設けたる如きは大いに注目すべき點であつた。さて同會の役員として發表されたのは、

- | | |
|------|-------|
| 會頭 | 島田三郎 |
| 幹部技員 | 岡鬼太郎 |
| | 栗島狹衣 |
| 興行主任 | 和田成義 |
| 背景顧問 | 和田英作 |
| 意匠擔任 | 久保田米齋 |
| | 岡本綺堂 |
| | 杉質阿彌 |

邦樂部員 杵屋六左衛門 清元梅吉 豊元生駒太夫

の諸氏で、同會の興行は十二月一日より五日間明治座にて開場するととなり、時間は午後四時三十分開幕、切符制度として萬事に改良の實を擧るといふ。又出し物は第一「新羅三郎」二幕第二「一谷嫩軍記」一幕第三「日蓮上人辻説法」第四喜劇「うつかり者」にて役割は

參議藤原夏賢、日蓮上人(鬼太郎)豊の次郎時秋、進士太郎(綺堂)新羅三郎義光、大學三郎熊本、後備歩兵少佐瀧野誇(狭衣)熊谷直實、後備歩兵大尉粒良混(實阿彌)大納言藤原師輔、禪僧、彌陀六(新十郎)源義經、粒百伴輕夫(登升)時秋妻小式部、妻相摸(九女)藤の方、妙、瀧野娘品子(清月)梶原(麗重)堤軍次(桃太郎)賤の男(鼻升)

等である。なほ前號に右田寅彦氏の加盟する如く記したるも同氏は故あつて加はらなかつたそうぞだ。

●文藝協會の演藝大會 これも豫報の如く十一月十日を以て歌舞伎座に演ぜられた。當日は幸天氣の好つた爲め來觀者非常に多く、會員以外の人々にて例

の通り入場し得るものと思ひて出掛たる人も少くなかつたが、既に入場券は其の前に底を拂ひ、これらの人々は已を得ず入場を謝絶したる程の盛況であつた。さて當日の來會者はいづれも同會に關係を有する人々なれば、學者紳士最も多數を占め、其の他華族あり書生あり、好事家ありて普通の觀劇とは客の種類を異にし、中流以上の有ゆる階級を網羅し、士問棧敷階上階下立見場を除くの外満場立錫の餘地なく、されどいづれも同情を有てる人々とて一時入場に多少の混雑を來したるも、素人のマナー・ジヤ一の事業として萬事設備の不行届の點あるも寛恕し、不平囂々の聲を聞ずいとも靜肅を保ち、さながら觀客にも改良の行はれたるやの概があつた。さて演藝は午後五時開幕「桐一葉」ヴェニス商人「常闇」と順次に無事演了し散會したのは午後十時であつた。

京都の洋畫家劇 晚秋の東京には文藝協會に毎日新聞社の文士に、い

づれも素人劇の新風目ざましき有様、これは雅びの西の京、關西美術會では今年の年忘れか來ん新玉の初春に洋畫家劇をやらうといふ計畫、もう一つ奇抜なのは今、京都で人も知つたる淺井忠氏さては京都大學教授中澤博士を始めとして高等工藝學校、關西美術院のプロフエツサー達が登場するといふ噂、いよく熟議の上は京都の明治座か歌舞伎座遊で掛場のつもりだそうだ。

大阪帝國座の新設

東京に設けられる帝國座と相對して今度大阪でも此擧が企てられた、發起人は北濱銀行の岩下清周氏である。

坪數四百六十坪、高さ四十八尺

で洋式の新建築を辰野博士が設計して大林組の請負で、本月(十二月)中に着手するといふことだ、贊助には伊藤侯あり栗野大使、金子男爵あり、マナーヂヤとして例の川上音治郎らが今度洋行までし

て内外部の裝飾、設備を調べてくるはづと聞く、そこで口善惡なき京童は東京の帝國大劇場が今に至り一向涉取らぬを見て後の雁が先になると云てをる。

●荒川重秀氏 今度毎日新聞の演劇會の洋劇部主任となつたる荒川重秀氏は東京商船學校などの講師で米國哲學博士といふ立派な肩書學位をも有してゐる人で今回の第一回の實演會にも出やうと意氣込てゐたそうだが、たゞ位紙のある所より宮内省の故障があるやもしれずとか、西洋では名優に爵位を贈る例もあるがこゝらがまだ容易に一掃し難い舊思想であらう。

●女優學校試演 前にも記したが若柳燕嬢は市川九女八を動かして女優學校を設けたが、その第一回の試演を十一月に四谷の瓢座で催したが、燕嬢と少數の人の外は素人であるが稽古のまだ熟しない割合によく出来たといふともかく大にやつて見のがよい、●藤八拳の名引會 十月廿日のことだ、牛込前樂坂

下の琴當貴で藤八拳の名引があつた、牛込區會議員の柿沼といふ人が鬼丸といふ名を同門の善曉にゆづり、その善曉がまた自分の名の善曉の名を砲兵工廠の職工で濱村といふ男にゆづる此の二ツの披露が催された、これに牛込、富士見町の藝者で拳に黒い連中も集り、昔振りの拳角力圖會にあるように四本柱で拳角力を當日やつたといふ。

市立圖書館の兒童室

目下建築中の日比谷公園内市立圖書館は木造で書庫丈煉瓦造りとし、閱覽室は普通の外に兒童室に婦人室とを設け、兒童室は十三才以下のものを容れ、監督者監視の下に自由に讀書さす方針だそうだ、兒童室の設けは今度始めてある。

少年少女の會合

近年兒童教育に關しては一般社會の注意を促してきたようだ。現に大阪のお伽俱樂部及お伽團や東京のお伽噺會の如き會合が諸方に盛んなのは幼稚園や

小學校にのみ兒童の教育を委ねておくことの愚なるを悟つた現象で、智育情育を施すのは必ずしも保姆や先生の專業でないことを知つた社會の自然の要求であらう、これは獨り少年にのみ限らぬ、大日本少女會の如きがあつて十一月十一日には澁谷の實踐女學校で第二回大會が開かれた、神奈川や埼玉邊からもやつてきた少女の數は七百餘名もあつたといふ盛なことである。

團子坂の人数

今年はお天氣つゞきの菊日和といふので天長節をばさんて人出の賑は非常なものだつたそうだ、植十、種半、植梅、植物の四軒の天長節に於る見物の數は
種半 四萬二千十八人 植梅 三萬九千六百三十人
植十 二萬六千四百人 植總 二萬九百五十五人

といふ話である、これにて其一斑が知れる。

東京市歌募集

今年東京市で小學兒童をして歌はしめる爲め市歌を募集する計畫があるが其の内容は、甲乙の二つに分

ち、甲は儀式に乙は日々の遊戯に用ひ、甲は専門家に托し乙は一般に募集する由。

名家の骨董四散す

千種屋といへば昔から大阪の舊家、系統も正しい家である、今の主人平瀬露香氏は通人で多藝多能の風流兒であると共に貨殖の道に迂い、別に之といふ程の大損害もなかつたが近年家計振はず、その財政整理のため曩にも其所藏の骨董を入札に附して沽却し巨萬の金に代へたと聞いてゐるが又々去月、殘品を出して競賣に附したが其の點數は八百點で二十萬圓といふ巨額の賣上げてあつた、いづれも天下の名器ばかりであるが其のうちにも、松花堂遺品の硯箱は一萬六千圓で、ノンコの黒茶碗、銘千鳥は原叟の箱で一萬六千圓、外にも利休の棗とか白雁の香合とか珍物名寶は流石に平瀬家の道具と世にいはるゝ程のもの計であつた、主人露香氏は今や病をもつて大阪の天満長池の別荘に臥床してゐるそうだが、本好

き道具好きの氏が此骨董を手離すのはよくく仔細のあるとてあろう、大家の末路實に悲むべきものである。

大博覽會の場所

大博覽會建設の場所に關する諸説、大森目黒一圓の地を説くもの一つ、青山練兵場に新宿御苑を共用して説くもの一つ、上野公園を中心とする説、之に田端邊を撰ぶべしといふあり、東京灣を埋立るべしと唱ふるあり、市參事會や郡部からの府會議員やいゝろの方面からいゝろこのような話が持ち上り運動も近いうちにはじまるであらう。

菊花品評會

十一月十八日に一つは大隈伯の邸で日本園藝會の總會を、一つは會禰男の邸で秋香會を全日に二ヶ所で開催されたが何れも菊花品評の盛大な會合であつた。

美術界

美術學校と美術協會といへば目下日本の美術界二大

權威であるが兩雄は並び立たずとは昔からの諺通り、美術協會には岡倉天心氏これに對して美術學校には正木校長がある、此二氏の軋轢は是迄も美術學校と美術協會の喧闘ともなつたが、十一月月上旬美術院派にして美術學校教授たる下村觀山氏が美術院へ加はるべく他の人々と共に留送別の筈を上の野の一旗亭に張らんとした、すると之を聞いた學生の憤慨は一方ならず觀山氏もこれには僻易して當日出席しなかつたそうだが、日本畫界の混亂といふ程でもないが、畫作の方は割合に進歩しないで、却てこんななどに力癩を入れてをるのは畫界の爲めに惜むべきではないか。

- ▲古美術品展覽會 十一月一日二日の兩日 於三十間堀さきつれ
- ▲天籟畫塾十日會 十一月十日 於神田上白壁町同塾
- ▲美術研精會 十一月十二日 於上野花月亭
- ▲眞美會 十一月十八日 於小石川久堅町同會
- ▲尙美會 十一月十一日 於兩國俱樂部
- ▲日本漆土會 十一月十五日 於上野花月亭
- ▲天真社例會 十一月十五日 於 同 社

能樂界 足利時代の遺物として今に保存され且つ觀賞され、それ相當に「メリット」も認められつゝある、能樂は謡曲と共に近年めき／＼と流行し出した、その餘波は近比貴婦人界にも及んできた、靖國神社の能樂堂にはその觀客中、若干の貴婦人をみかけぬことはない位で、各流の名家へ入門の婦人達は引もさらず、大河内子爵夫人を始め山内、井伊、藤堂の各夫人はいづれも熱心であるそうだと。

落語界

- ▲寶生會 別能 十一月十一日 於靖國神社能樂會
- ▲梅若會 月並能 十一月十八日 於淺草南元町梅若會
- ▲喜多會 十一月十五日 於飯田町喜多舞臺
- ▲能樂俱樂部 十一月二十日 於靖國神社能樂堂
- ▲寶生俱樂部 十一月十八日 於神田全舞臺
- ▲觀世舞臺秋期別會 十一月廿五日 於牛込新小川町觀世舞臺

- ▲東京南畫會 十一月十八日 於常盤木俱樂部
- ▲研美會 十一月十八日 於本所牙影學會
- ▲文墨協會 十一月廿三日 於江東伊勢平權
- ▲競美會 十一月廿五日 於淺草草津亭
- ▲讀講熟研究大會 十一月廿三日ヨリ廿五日迄 於上野不忍辨天境內

かねて東京朝日で募集した新作落語の當選したのは

- 第一等 新田 一想 日本橋 轉々 道人
- 第二等 尺 八 下谷 音平 繁丸
- 第三等 五 萬 圓 神田 善茶 庵
- 全 愛 犬 下谷 座 山人

右の四種で順次同紙上に發表してゐるが、目下の劇壇に新脚本を呼ぶ聲が頻であると共に落語界にも新作の要求あるは無論にて「朝日」の此の募集は時宜を得たものである。なほ同紙はこれに引續いて第二回の募集をはじめた。

- ▲三 遊 共 睦 會 十一月三日と四日 於京橋 金澤
- ▲第廿回落語研究会 十一月十一日 於常盤木俱樂部
- ▲落語けいこ會 十一月十一日 於上野 鈴本亭
- ▲演 藝 講 話 會 十一月十一日 於兩國 立花家
- ▲三 遊 共 睦 會 十一月十八日 於京橋 金澤
- ▲落語けいこ會 十一月十八日 於上野 鈴本亭
- ▲演 藝 講 話 會 十一月十八日 於兩國 立花家

●其他の諸演藝會をあくれば

- ▲富 本 大 漫 十一月十一日 於淺草 植木屋
- ▲第三回浪花節研究会 十一月十一日 於開 盛座
- ▲女義 太夫 演藝會 十一月十一日 於芝 琴平亭
- ▲長 唄 會 第九回 十一月廿一日 於常盤木俱樂部
- ▲第十一回常盤津橋正會 十一月廿四日 於常盤木俱樂部
- ▲長唄研精會秋季大會 十一月二十日 於常盤木俱樂部

▲三田の演奏會 十一月十七日 於三田演說館
 ▲長唄研精會秋季大會 十一月廿二日 於常盤木俱樂部

劇 界

新富座に森田勘彌の追善興行をして其の子の三田八が勘彌の名を襲ぎ披露をした。舊劇派の名ある俳優は概ね此の座に顔を出さぬものなくなかくの人氣であつたが其の外は例に依て例の如く取り出でいふ程のとはなかつた。

十一月各座興行一覽表

劇場	脚 本	俳 優	開 演 日
歌 舞 伎 座	文藝協會大會	市藏、八百藏、荒次郎、梅幸、松助、左團次、又五郎、菊五郎、納升、高倉、吉右衛門、高麗藏、女真、三津、藤三郎、秀調、芝	十一月 日ヨリ
新富座	芋田勘彌追善興行 「水耕傳」「安宅崩」 「國性爺合戦」「口上二島」爲朝「連獅子」-「鎌倉三代記」「宮比神樂」	猿之助、羽左衛門、左團次、猿之助、小團次、高麗藏、時藏、荒次郎、女真、新十郎、蓮女、秀調、九團次等	十一月 日ヨリ
明治座	「萬葉讀血染御書」「大藏卿」「關の戸」		十一月 日ヨリ

本郷座	「俠艶録」 高田、喜多村、木下、青木、佐藤、兒島、深澤、木村、藤澤等	十月廿七日ヨリ
市村座	「たんまり」 「双蝶々曲輪日」 「尾上梅壽一代」 「紅葉狩」 梅幸、羽左衛門、菊三郎、吉右衛門、菊五郎、秀調、駒助、芙蓉、新十郎、松助等	十一月十日ヨリ 五日ヨリ
眞砂座	「鹽原多助」 「吾輩は猫である」 伊井一派	十一月三日ヨリ
宮戸座	「神龜矢口渡」 「橋辨慶」 「後編玉とり姫」 「夜之部」 「蛙倉重四郎」 「阿波の鳴門」 「天切」 「寶庫魂入替」 「布晒秋玉川」 時藏、小團次、鬼丸、源之助、紅若、菊四郎、鶴之助、猿歌昇、桑三郎、猿之丞等	十一月一日ヨリ
三崎座	「知盛」 「釋迦」 「紀文大盡」 錦糸、來花、千升、鯛喜之助、紀久八、桂八、燕嬢等	十一月十日ヨリ
開盛座	「暗流」 中野一座	十一月十日ヨリ
常盤座	「畫之部」 「又々玉とり姫」 「夜之部」 「鬼之涙」 「八大陣」 池田、千崎、大井、境、佐藤、菊池、中村等	十月廿一日ヨリ
柳盛座	「畫之部」 「玉とり姫」 「拙腕左小刀」 「夜之部」 「若分舟」 「上杉謙信」 中村梅雀一座 盛隆會一座	十月廿一日ヨリ 十一月一日ヨリ

國華座	「畫之部」 「伽羅先代萩」 「在原系圖」 「忠臣藏容講合」 「夜之部」 「二十嵐鬧爭」 「村井長庵巧破傘」 女優學校創立演劇 「藝人の子」 「八重だすき」	十藏、女寅、市藏、登、条、三郎、眞、芝、芳三郎、銀之助等	十一月一日ヨリ
瓢座	「千本櫻」 「辨天小僧」 「千兩幟」 「後藤又兵衛」	九女八、燕嬢一座	十一月一日ヨリ
壽座	「徳川天一坊」	時藏、團升、歌昇、花助、升三郎、芝鳥、家壽之助等	十一月十日ヨリ
深川座	「明治鹽原」 「江戸の花」	桃吉、小若、竹松、昇紅、君園子、蝶昇等	十一月十日ヨリ
橫濱座	「二蓋笠柳生日記」 「瀧夜叉」	芙蓉團鳥居一派	十一月十日ヨリ
喜樂座	「伊賀復讐」 「壺山姥」 「酒屋」 「三日月お蝶」	團升、紅若、舞雀、鶴之助等	十一月十日ヨリ
大阪角座	「活動寫眞」		十一月十日ヨリ
中座	「祖國」 「新オセロ」	川上一座	十一月二日ヨリ

朝日座	「筆子」	芝雀、延二郎、秋月、山田、成太郎等	十一月一日ヨリ
辨天座	「義經千本櫻」 「東紫戀色揚」	團藏、右團次、橘三郎、福助、政治郎、我童、右之助以下大一座	十一月二日ヨリ
天滿福井座	「有馬猫」 「恭盤太平記」 「戀飛脚大和往來」	龍次郎、當之助、珊封、南枝等	十一月十日ヨリ
天滿壽座	「筆子」 「大藏卿」 「野崎」	角藤定憲一座	十一月十日ヨリ
稻荷文樂座	「布引」 「紙子仕立」 「兩面鑑」 「關取二代鑑」	攝津、南部、佐野、染富、津、越路等	十一月十日ヨリ
御靈文樂座			十一月十日ヨリ

計音

●山本芳翠氏 洋畫の大家山本芳翠氏は十一月十五日午後三時、五十七才を以て腦溢血症で逝かれた、明治の初め南畫を京都へ畫入久保田雪江に學び、後、横濱で九姓田芳柳氏の門に入り洋畫を研究し明治十一年、佛國に遊びセローム氏につき九年間、彼地で勉勵して歸國し日清、日露の兩戰役にもカンパスを肩に從軍して其技を磨く等、繪事に忠實なことは其比を見ぬ程であつた、白馬會や明治美術會にも盡す所は少くなかつた、その襟懷の洒々落落たる多藝多能の風骨を有し階界の先輩として推されてゐたのであつたが今や亡き人の數に入たのは昔いともである。

●竹本彌太夫 攝津大塚、津太夫等と并べて斯界の三元老と仰

がれた大阪の竹本彌太夫は此夏以來持病の肺患の爲悪く訪客にも面會絶えする程であつたが、十月卅日、醫藥効なく白玉樓中の人となつた、享年七十歳。

●力士嶋瀨川 伊勢海部屋の力士嶋瀨川といへば一寸人にも知られた力士、此程春日山、鬼龍山と共に地方巡業に赴き甲府から信州上諏訪へ乗込まんと、十月廿六日午後一時半の瀛車にて駈付ける途中、心臓麻痺を起して頓死を遂げた、郷里は仙臺の涌谷、年は卅九才である。

●大阪二輪加帥團藏 大阪南地千日前の改良座の鶴屋團九郎一座で一寸幅を利してゐた鶴屋團藏は十月廿九日南區難波新地雁次郎裏の自宅で死去した、享年四十八才。

新刊紹介

●コブシ 前篇(小杉天外著、章光閣發行)

かねて「讀賣新聞」に連載されて好評を博して居た小杉天外氏の寫實小説コブシの前半は今度クロース製三百餘頁の菊版一冊物として出版された、全部の評は完了の後でなければ下せぬが、本篇丈の脚色をいへば、主人公は新庄政男といふ高等學校の學生で學術運動にも人後に落ちず級友にも敬愛されてゐる美少年である、さて政男の亡父が殘して死んだ財産の大半は姉婿に奪はれ、女子大學へ通つてゐるおのれが妹藤子の監督を托して置た豊崎博士の夫人節子からは道ならぬ戀をいひ寄られ、此事はしなく惡徳新聞の掲載する所となつて遂に學校を追はるといふに筆を止めてある。天外氏獨得の筆致も世態の曲折、人情の表裏、各人物の性格、背景の情趣など巧みに描かれた厭味のない所は「過去に例なき苦心の作」なるを認むるとがてき、次で出づべき後篇續篇、孤影零丁たる勝ち氣の新庄政男の運命、

及びかれを中心として動いてゐる／＼の人物の境遇が如何に發展し來るかと待ち遠しい(正價八十錢)

●理想の人 (安部磯雄著、金尾文淵堂發行)

本書は倫理、教育、社會の各方面に至つて安部氏の描ける理想の人物を説いたものである、一面からは安部氏平生から抱懷して居られる修養論の一端とも見られる、何れも實踐を主とした穩健な議論である、一讀の價値は十分ある、本の縁紙の質素なのが一番嬉しかった(正價七十錢)

●西詩薫 (西村醉夢著、藝文舎發行)

本書はパルネス、コルリツヂ、セレー、パイロン、キーツ外二三の名家の西詩を譯して之に多少の注解を加へたもので、中學生諸君の文學研究の資にてもといふのが此著の主意であるが、詩の撰擇も當を得てゐるし、譯筆も明暢、注解も親切である(正價五十錢)

●少年文庫 第一卷(早稻田文學社編、金尾文淵堂發行)

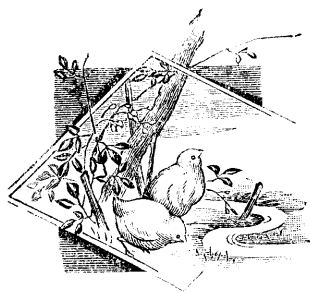
四六版、二百四十頁、收むるものはお伽噺に唱歌、通俗科學談など、いづれも少年、少女のよみ物として恰好の作である、坪内博士、巖谷小波氏等の寄稿も見つけた(正價貳拾錢)

●芝居 (第一卷第一號) (東京藝林社)

本誌發行の主旨は「社會趣味の發展と人間共樂の旨意に基き、一には昭代藝界の批判をなし、指導をなし、他は之を見ざる人々にも記叙の丁寧を期し」云々、趣味は舊劇に傾いてゐるやうだ(定價十五錢)

- ▲中央公論 第廿一年第十一號 反省社
- ▲新公論 第廿一年第十一號 新公論社
- ▲無盡燈 第十一卷第十號 無盡燈社
- ▲海國青年 第一卷第三號 左久良書房
- ▲白百合 百號紀念 東京純文社
- ▲心の花 百號紀念 竹柏會
- ▲早稻田學報 第四百四十一號 早稻田學會

- ▲明星 午歲第十一號
- ▲帝國文學 第十二卷第十一號
- ▲手紙雜誌 第三卷第十一號
- ▲音樂新報 歌劇號
- ▲豊年パツク 十一月の卷
- ▲早稻田文學 第十八號
- ▲みづえ 第二百三十七號
- ▲哲學雜誌 第十二卷第十四號
- ▲太陽 第八年第二號
- ▲日本婦人 第七十九號
- ▲歌舞伎



- 新詩社
- 帝國文學會
- 有樂新報社
- 音樂新報社
- 早稻田文學社
- 春鳥會
- 哲學會
- 博文館
- 帝國婦人協會
- 歌舞伎發行所

社告

來るべき本誌は本誌誕生以來最初の新年を迎へむとす
 る也されば本年は本號を以て終りとし來年よりは第貳年第一號に改むると共に大に面目を新にして諸君に見えむとす

明治三十九年十一月廿八日印刷
 明治三十九年十二月一日發行

不許複製

編輯者 水谷弓彦
 發行者 東京市神田區表神保町二番地
 印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
 株式會社 秀英會社
 電話新橋十八番

編輯所 東京市牛込區天神町六十六番地
 發行所 東京市神田區表神保町二番地
 振替口座四一〇五 電話本局一六一八

彩風閣

大賣捌所

東京市神田區表神保町
 東京市京橋區尾張町
 東京市京橋區吳服町
 東京市神田區裏神保町
 東京市京橋區繪屋町
 大阪市北區東梅田町
 大阪市東區南渡邊町
 東京市堂
 東海館
 北隆屋
 上田館
 良明堂
 盛文館
 杉本書店

趣味定價表

壹册金貳拾貳錢 六册前金貳拾貳錢 拾貳册前金貳拾貳錢 ●郵便切手代用は割増	郵税金貳錢 共金壹圓參拾錢 共金貳圓五拾五錢	壹頁二付 八拾五圓 參拾五圓 拾八圓	特等(意匠) 一等 二等 三等	壹拾五圓 拾五圓 拾八圓	半頁二付 貳拾圓 拾五圓 拾圓
--	------------------------------	-----------------------------	--------------------------	--------------------	--------------------------

●原稿は毎月十五日迄に御遣はし可被下候